



Back to

0 1 9 5 8
2 0 6 0

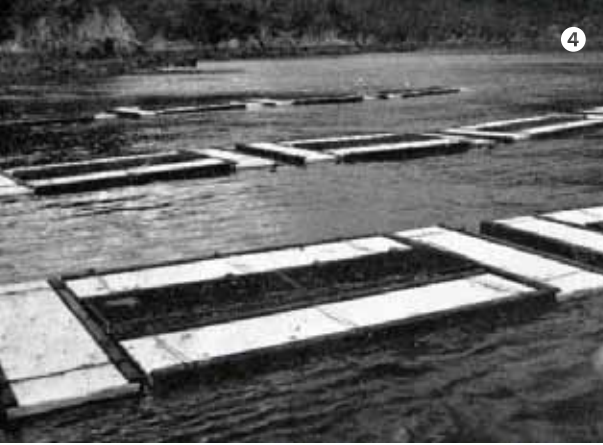
鹿児島島の海面養殖業

豊かな自然の恵みと
養殖業に携わる人々の情熱が
全国有数の生産地への原動力に

湾や入江が多く、温暖な気候で水温も安定しているなど自然条件に恵まれている鹿児島県では、昔から養殖業が盛んに行われてきました。なかでも、海面に生簀いけすや網を設置し海苔や魚介類を育てて獲る海面養殖業は全国でも有数の生産地になっています。

鹿児島県では、明治36年に鹿児島市の山下町に設置された鹿児島県水産試験場(現・鹿児島県水産技術開発センター／指宿市)が、試験場創立と同時にカツオ餌料用キビナゴの飼育実験を実施したのが、県内における竹籠たけご生簀いけす式といわれる短期蓄養※1事業の始まりだとされています。

鹿児島湾(錦江湾)では、かつて海苔やマダイ、マアジなどのさまざまな魚種が養殖されてきましたが、現在はブリやカンパチの養殖が最も盛んです。昭和33年に沿岸漁業振興対策補助事業の一環として垂水市の牛根溶岩しほねに築堤式かん水養殖池が造成され、県内初のハマチ養殖※2が開始されました。その後、ハマチ養殖は湾内各地に広がりましたが、平成元年頃から次第にカンパチ養殖へと魚種転換が図られるようになりました。同年7月の台風11号では生簀が流出したり沈んだりするなど海面養殖業は大きな被害を受けましたが、その後も水質観測システム※3の導入や環境にやさしい餌の開発など、さまざまな



①海潟漁港の養殖風景(垂水市) ②牛根漁港の築堤式ハマチ・マダイ養殖。餌船からの投餌風景(垂水市・昭和38年)
 ③錦江湾での海苔の養殖風景(鹿児島市・昭和40年) ④東町漁協のタコ蓄養施設(長島町・昭和40年)
 ⑤昨年4月に完成した「鹿児島県カンパチ種苗生産施設」(垂水市)

努力が続けられています。現在、「かごしまのさかな」づくり推進協議会が、福山養殖や垂水市、ねじめ、牛根、西桜島、鹿屋市、山川町の各漁協の養殖ブリ・カンパチを、品質の優れている「かごしまのさかな」ブランドとして認定。なかでも、垂水市漁協は養殖カンパチの生産量が単一漁協としては日本一です。

また、長島地域の東町漁協は昭和41年からブリの試験養殖を開始。現在、養殖ブリは単一漁協としては生産量日本一で「かごしまのさかな」にも認定されています。

その他、奄美地域の加計呂麻島には平成7年に「国営栽培漁業センター奄美事業場」が完成。現在瀬戸内町は日本最大級のクロマグロ養殖基地として知られており、鹿児島県の養殖クロマグロの出荷量は全国トップです。

県は昨年3月、カンパチ養殖用の稚魚を安定的に大量生産することを目的として、全国初の種苗生産施設を垂水市に整備。産卵時期を調整するため人工的に日の出や日の入りを再現できるLED調光装置や、温泉熱を使うた水の加温施設などが採用されており、安心、安全な生産の確保やコスト低減などが期待されています。

昨年度の県内におけるカンパチを含めたブリ類養殖の生産量は、19年連続の全国トップ。これらは、アメリカや香港など海外にも輸出されています。今年5月には、垂水産養殖カンパチの冷凍加工品がマカオに向けて初めて輸出されました。

県外や海外へも届けられている鹿児島県産の養殖魚。そこには「おいしい魚をたくさんの人々へ」という、海面養殖業に携わる人たちの強い思いと努力がありました。

参考資料：「鹿児島県水産技術のあゆみ」
 「平成22年度 鹿児島県水産要覧」

※1すでに市場サイズになっている水産動物を、一定期間池や生簀に収容しておくこと。
 ※2ブリは大きさによって呼び名が変わる出世魚で、一般的に60センチ前後をハマチ、80センチ以上をブリと呼びます。

平成22年の鹿児島県の海面養殖業における主な養殖魚

魚種	生産量(トン)	全国順位	全国シェア
ブリ	20,035	1位	約21%
カンパチ	21,461	1位	約53%
クロマグロ	3,200	1位	約35%
クルマエビ	453	2位	約28%
ヒラメ	662	3位	約17%

主な海面養殖 MAP

- A ブリ
- B カンパチ
- C クロマグロ
- D クルマエビ
- E 真珠
- F マダイ
- G シマアジ
- H ヒラメ

